誰も置き去りにしない、生き抜く力にあふれた子どもたちを育むために

インフォメーション

心に届けるおすすめコンテンツ

身近な教育の話題をホームページのコラムに掲載！

《顧問》
勝本孝夫

光と心

突然ですが、クイズです。「世の中で、最もスピードが速いものは何でしょうか」―これは、私が校長を務めていた小学校の児童朝会（以下、「朝会」）で子どもたちに投げかけた言葉です…

続きはWEBで »

《顧問》
市川祥子

被服でその人の性格までわかってしまう？

私たちが普段あたり前のように着用している衣服。今日は何を着ようか、これを着て行って大丈夫かしら、この格好は人からどんな風に見えるかしら、と被服に少なからず関心を持っている人は…

続きはWEBで »

《関西学院初等部 教諭》**森川 正樹 先生の**
「特別講演動画」も公開中!!
ホームページで是非ご覧ください

詳しい内容はこちらから
https://nikke-edu.org/

一般会員募集

私たちと一緒に、「子どもたちが生き生き伸び伸びすごせる環境づくり」に参加していただけませんか？
子どもたちは“未来の宝”です。 私たちが発信する未来の宝を育む情報を、 学校・家庭・地域で是非ご活用ください。 入会のお申し込みは、 ホームページでご案内しています。

編集後記

現在の世界人口は約77億人で、人生100年として仮に1秒に一人の人と出会ったとしても、その半分の人に出会うことすらできません。そういうことから考えると人との出会いは非常に重要なものだと思います。

今のインターネットの時代においては、意志さえあれば世界中の著名な方とも繋がることが可能になってきています。偶然の出会いの中で何かに気づかされ、また別の偶然の出会いの中でその気づきが磨かれるという経験を重ねていくと、振り返ったとき、これらの出会いは必然だったのではと感じます。「気づき」は個々人の心の奥底にあったものから生まれると思いますし、自分が主体性を持って行動していて生まれてくるものだと感じます。そのために、子どもたちが多くの人と主体的に関わりながら、様々なことについて考え、行動を決め、結果を求めて努力する環境を用意してあげたいと思います。

一般社団法人ニッケ教育研究所
理事長　楠本　景央

未来Watch みらいウォッチ
2021 夏号（年４回発行） No.6
2021 年 7 月 20 日 発行
本紙掲載の記事は、 複写・複製・転載を禁じます。

《発行》 一般社団法人ニッケ教育研究所
〒541-0048 大阪市中央区瓦町 3 丁目 3-10
TEL: 06-6205-6665 https://nikke-edu.org/

2021 夏号
2021 年 3 号 No.6
ニッケ教育研究所 会報誌

未来Watch みらいウォッチ

生き抜く力にあふれた子どもたちを育むコミュニティー

※写真は、キンレンカです。

特集

私がつくる子どもの笑顔 第２回

『やれば、できる！やったから、できた！』
～児童が主役の学校づくり～

レポート
学校制服は本当に高いのか
～研究報告～

コラム
人との出会いは必然
―今こそ、学校・家庭・地域での豊かな人間関係づくりを―

インフォメーション
心に届けるおすすめコンテンツ

一般社団法人
ニッケ教育研究所
NIKKE Institute of Education

私がつくる 子どもの笑顔

子どもたちの元気な声や輝く笑顔にあふれた学校をめざして、現場ではさまざまな創意工夫が行われています。「私がつくる 子どもの笑顔」では、現職の校長先生に学校づくりの考え方や具体例を紹介していただき、子どもたちを育む学校環境についての意識を深めていきます。
第2回は、やたなか小中一貫校の阪上聡樹校長です。

第2回 『やれば、できる！ やったから、できた！』
～児童が主役の学校づくり～

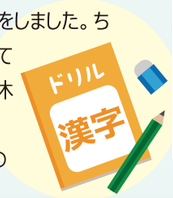
《やたなか小中一貫校　大阪市立矢田南中学校　大阪市立矢田小学校》阪上（さかうえ） 聡樹（さとき） 校長

民間公募の小学校長としてスタートを切った2014年4月、着任早々大きな課題に直面しました。それは、児童の自己肯定感の低さでした。何とかしなければと思うとともに、児童一人ひとりが目を輝かせてチャレンジできる取組と、学校の空気感を変えていく必要があると強く感じました。以降、学校運営に際しては、学校に集う全ての人（児童・教職員・保護者・地域住民）の思いを、対話を通じて知ることを最も大切にしています。その上で「学校運営の3つの基本方針」のもと、教職員の皆さんと心を一つにして全力で取り組んでいます。ここでは、前任の小学校で実践した「児童が主役の学校づくり」についてお話します。

学校運営の3つの基本方針
- 全ての教育活動は、その中心に児童を据えたものであること。
- 教職員を大事にすること。
- 保護者や地域の皆さんと常に良好な関係を築くこと。

「漢検」の導入

子どもたちの基礎・基本の学力である「読み・書き・計算」の力を向上させるため、まずは漢検（日本漢字能力検定）の導入を考案しました。そして、**誰もが学習できる環境を整える**という観点から、初年度は過去の出題で「学校独自の漢検」を実施することにしました。そこには、もう1つの狙いがありました。それは、**自主学習の定着化**です。各級ごとの独自の練習問題の作成や、校内に自主学習スペースを設けるなど、児童の学習意欲を高めるためにさまざまな工夫をしました。ちなみに自主学習スペースは、部分的に広くなっている廊下の空間を活用したもので、児童が昼休みや放課後自由に学べるようにしています。



一定水準に達した児童には漢検合格相当の認定書を、逆に達していない児童には努力賞を賞状として授与し、次年度への挑戦につなげました。これらの取組によって、全児童が漢検か独自漢検にチャレンジするようになりました。

廊下に設けられた「自主学習スペース」

日曜学習教室「寺子屋」の創設

保護者の切実な思いを聞いたことがきっかけで考案・創設したのが、日曜学習教室「寺子屋」です。**塾に行けない児童や家庭での学習が困難な児童に、何とか地域の教育力をお借りして休日に学習できる環境を提供したい**との思いからでした。寺子屋では児童の自主性を重んじ、国語と算数を自主学習できることにしました。その仕組みは、教材と場所の提供を学校が、学習指導を地域の方が、児童の送迎を保護者がその役割を担うというものです。また、参加児童の学習カルテを作成し、担任の先生からは寺子屋で学んでほしい内容や指導してほしい内容を、寺子屋の学習指導者からは学びと指導の結果を記述することで連携を図ることにしました。寺子屋には、低・中学年を中心に毎年約30名の児童が参加しました。修了者には修了証を授与するとともに記念品を贈呈し、学びへの機運が高まるように工夫しました。

児童からは「今日も先生に会えてうれしいし勉強も楽しい」、学習指導者からは「今日も頑張っている児童と一緒に楽しくやっています」との声を聞いています。特筆すべき点は、担任の先生が様子を見にきたり、学習指導したりするようになったことです。「クラスの児童が頑張っている様子が気になって会いに来ました」と ―― 。

学校・地域・保護者の連携による「寺子屋」

「全国小学校ラジオ体操コンクール」への参加

児童たちと一緒に全国大会を目指せる競技等がないか模索していた折、元・中学校の校長先生の勧めで「全国小学校ラジオ体操コンクール」に応募しました。そこには2つの狙いがありました。1つは、全国大会参加という大きな目標を、学年が異なるメンバーと共に果たすことで**仲間づくりの意識やリーダーシップを育む**ことです。もう1つは、**集団行動での規律を身につける**ことです。保護者の承諾を得て、約30名の児童がチャレンジしました。毎朝８時に集合、始業までの20分間と水曜日の放課後に45分間の練習を行いました。指導者は主に私と教務の先生、そして応援団の先生方です。

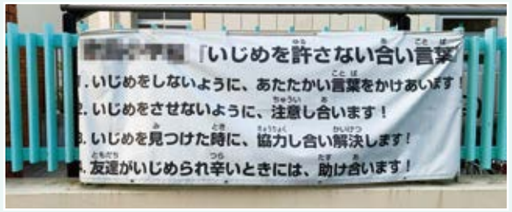
その結果、３年目に敢闘賞（全国25位以内）を受賞し、表彰状と記念品を受け取ることができました。全国大会で偉業を成し遂げた児童たちは、きっとこれからの人生で苦難に遭遇しても乗り越えていけると私は確信しています。

児童会全体による「いじめ撲滅宣言」の制定

いじめをなくすために何が必要か ―― 児童会の中で、自分たちの問題として話し合ってもらいました。すると、いじめをなくすためのポスターづくりや、自分たちの言葉で表現した「いじめを許さない合い言葉（～し合うという思いから『合い言葉』と表現しています）」の作成が提案されたのです。そこで、全校児童から合い言葉に相応しい言葉を募集し、それを基に児童会で草案が作られました。その際、民主的なプロセスを経るよう担当の先生に助言し、パブリックコメントの期間を設け、各クラスでの説明を行いました。最終的に児童会代表が校長に上申し、2016年12月に「いじめ撲滅宣言」が制定されました。その後、合い言葉を昼休みに放送するなど、児童会としての啓発活動が行われています。合い言葉は今も引き継がれ、校門付近に掲示されています。

この取り組みは、**全児童の間で「いじめを許さない」という意識が高揚**しただけでなく、自分たちで決めた合い言葉に誇りや自信を持つことで、**どんな難問にも挑戦する力**になると思っています。

いじめを許さない合い言葉
1. いじめをしないように、 あたたかい言葉をかけあいます！
2. いじめをさせないように、 注意し合います！
3. いじめを見つけた時に、 協力し合い解決します！
4. 友達がいじめられ辛いときには、 助け合います！



校門付近に掲示されている「合い言葉」

PTA とのコラボによる「標準服」の導入

校長就任時の小学校では標準服を導入しておらず、帽子のみ採用されていました。そのため、学校生活と私生活の切り替えがうまくできない児童や、服装に家庭生活の影響が見受けられる児童がいました。一方で卒業式の服装が年々派手になる傾向もあったため、PTA役員の皆さんと話し合い、**標準服の導入に意義があるとの認識を共有**するに至りました。

標準服の導入にあたっては、保護者の意見を聞き取る機会を設けました。また、複数業者の企画提案を公開で選定する方式を取りました。最終的にPTA投票によって決定し、2019年4月入学の児童から標準服を導入しています。採用した標準服は、**児童の通学上の安全性を高める**だけでなく、**学習規律を確保して学校生活の充実を図る**効果があると考えており、**学校の空気感が大きく変わる**ものと信じています。

おわりに

今は、新型コロナウイルス感染症対策を最大限に講じながら、教育活動を実施しなければなりません。これまで支えてくださった全ての方々に感謝し、そのつながりを大切にしながら、子どもたちの笑顔あふれる学校づくりのために、この困難に挑んでいきたいと思います。

学校制服は本当に高いのか　～研究報告～

《ニッケ教育研究所顧問》 市川（いちかわ） 祥子（しょうこ）
甲子園大学 心理学部 現代応用心理学科 専任講師、博士（学術）

今回は、 学校制服の経済性について、先日、日本繊維製品消費科学会年次大会にて発表した内容を基にレポートしたいと思います。

「学校制服は高い」。 そんなイメージがある学校制服ですが、 実際のところ、 私服の場合とどの程度の違いがあるのかという実質的な比較検討はなされていないというのが現状です。 そこで、 今回、 調査データとして得られた 2,067 名のうち、 公立小学校に通う小学生 1,843 名（学校制服導入：819 名、 私服導入：1,024 名）について、 実際に学校制服にかかる費用、 私服の場合の費用等、 検討しました。※調査：2020 年 7 月実施

分析の結果、 入学式にかかる衣服代については、 総じて学校制服導入の場合の方が高い傾向となり、 これは従来世間一般的に抱かれるイメージにマッチする結果となりました。 その一方で、 私服導入の場合、 一部の家庭で高額な費用をかけていることも明らかになりました。 私服の場合、 被服は自由度が高いことから、 どうしても家庭環境が反映される傾向が強くなり、 不均衡が生まれてしまう可能性が高まることが推測されます。

次に、 日々の通学に関わる被服費について検討したところ、 春夏シーズンの通学用被服費、 秋冬シーズンの通学被服費ともに、 私服導入の場合の方が学校制服導入の場合に比べ高めであることが明らかになりました。 更に、入学式における衣服代同様、 私服導入の場合、 通学用被服費に高額な費用をかけている層がある一方でほとんど費用をかけない層の存在が確認されました。 また、その費用の価格帯には中間層含めいくつかの階層があることも示唆されました。 このことから、 私服導入の場合、 日々生活する学校環境において「外見から判断される経済格差」の問題が浮上する可能性が考えられます。「外見から判断される経済格差」の問題は、 単なる家庭環境の違いという捉え方ではなく、 学校という小さな社会の中での子どもたちの人間関係のあり方や自己の捉え方等その形成にも大きな影響を与える要因であると考える必要があります。

学校制服は、 1 度購入すると数年は着用することが前提です。 今回のデータから、 小学生の場合、 在学中に一式買替があったとしても、 6 年間での通学被服費として捉えた場合、 私服導入の場合よりも費用を抑えることができる可能性があることも示唆されました。 また各家庭の経済状況や洗い替えの担保など生活状況によっては買い足しや買い替えが必須ではないことを踏まえると、 学校制服は家計への負担感の軽減が可能なツールとなり得る可能性を秘めています。 しかし、 入学式という「ハレの日」のためのみに着用する被服と入学式を含め数年に亘りほぼ毎日着用する学校制服に関する費用とでは、 本来別物の「サイフ」として捉える必要がある中で、 世間一般的なイメージはあくまでも「入学式時にかかる費用」という「同じサイフ」として捉えられている可能性があり、 この初期費用に対するインパクトと負担感を学校制服の価格の問題としてどのように解決していくかは企業にとって大きな課題であると考えます。

最後に、 学校制服導入に関しては、「あった方がいい／どちらかというとあった方がいい」が 45.8%、「ない方がいい／どちらかというとない方がいい」が 27.4%、「どちらとも言えない」が 26.9%となりました。 子どもにかかる費用の金銭的負担感に関しては、 1 位「学校外教育費（42.7%）」、 2 位「学校教育費（17.9%）」、 3 位「特に負担に感じているものはない（19.2%）」、 4 位「食費（8.8%）」、 5 位「服飾費（5.6%）」（6 位以下略）でした。 今回の調査結果においては、 公立小学校における制服導入に関しては概ね好意的である傾向が明らかになり、 子どもにかかる費用として「服飾費」への金銭的負担感は他の物と比較すると大きなものではないことがうかがえます。 しかしながら、ルールとして購入が義務付けられる学校制服に関しては、 その自由度の低さや購入時の金額に対するインパクトなどから、少なからずそれに対し挙がってくるさまざまな意見を見過ごすことなく、 1 つの社会的問題として対応することが求められるでしょう。 今回、 学校制服と私服の費用に着目しましたが、単にどちらが安いか高いかという問題ではなく、 そこからどのような問題提起がなされ、 それを解決するにはどうすればよいかという視点を忘れないよう我々は取り組む必要があるのです。

人との出会いは必然

今こそ、 学校・家庭・地域での豊かな人間関係づくりを

《ニッケ教育研究所顧問》 勝本（かつもと） 孝夫（たかお）　元・大阪市立榎本小学校校長（鶴見区）
元・大阪市立姫里小学校校長（西淀川区）

「この度、 縁ありまして、 この学校に着任することになりました。 どうぞ、 よろしくお願いいたします。」とは、 新たな学校へ赴任した際によく言われる挨拶ですが、 この「縁」という言葉には、 “この職場で巡り合った人と豊かな人間関係を結びたい” との心情が込められているのではないでしょうか。

それは、 私が教員として駆け出しだった頃のことです。 授業を行っている時間帯でしたが、 事前の連絡もなく保護者の方がお見えになられたのです。 自分の子どもと学級の子どもたちとの関係のことで悩まれた末、 止むに止まれぬ気持ちで、 直に担任である私に訴えに来られたのです。 授業中ということもあり、 放課後にお宅へ伺うことを約束して、 とりあえず帰ってもらいました。 授業を終えた後、 早速、 その旨を教頭へ報告したのですが、「じゃあ、君、行ってきなさい。」との言葉だけでした。 今ではこのような事案が発生したときには、 教頭もしくは副校長同伴で伺うものですが、 駆け出しの私は、 “いったいどのように話せばいいのか” と悶々とした暗い気持ちで保護者のお宅へ向かったことが、 今でも鮮明に思い出されます。 玄関のドアを開ける瞬間が、 一番の鼓動のピークでした。 恐る恐るドアノブを引くと、 そこで返ってきた言葉は意外でした。
「先生、よくぞ一人で来られたね。 まあ、上がってください。」
「先生が一人でやって来られたというだけでもう十分です。私は先生を信頼します。 私の子どもを、どうぞよろしくお願いします。」
この言葉とともに、 手土産もいただいたのです。 私は学校への帰路、つくづくと思いました。 “勇気を出して直接会って、言葉を交わすことがいかに大事であるか” そして、“直接会って、 言葉を交わすことで、 どんな人とも思いもしなかった望ましい関係が築かれる” と。

その後の教員生活でも、保護者・地域、そして教職員の方々との人間関係で悩むことが幾度となくありました。しかし、この時の経験が支えになってその都度乗り越えることができ、以前よりも豊かな人間関係を築くことができたのです。

“人との出会いは、単に偶然ではなく意味のあることだ”いや、もっと積極的に “この人と出会うのは、 必然であり、 出会うべきして出会ったのだ” と思うと、 不思議なことに、 相手がどんな人であっても “いとおしさ” が感じられ、 心の壁を破るエネルギーが出て、 相手をも包み込む心情が湧いてくるのを実感したのです。 “偶然と必然”―― 人との出会いに対する、 この意識の持ち方の違いは、 実はものすごく重要なことだと感じています。

人は、自分と気が合う人とは話しやすいものです。反対に、考えが合わない人や自分の性格とは真逆の人とは距離を置いてしまいがちです。しかし実は、 自分と考えや性格の違う人こそが、 最も自分を成長させてくれる人なのではないでしょうか。 “人は人によって磨かれる” は、 私の座右の銘でもあります。
自分の顔や姿等の外面は、鏡を通して見ることができます。同様に、 自分の性格や特質等の内面は、 周りの人の評価を通して知ることができるのではないでしょうか。 さらに、 身の周りに鏡を多く置けば置くほど、 自分の外面の全体像が見えてくるように、 周りの人との豊かな人間関係を多く築けば築くほど、自分の内面の全体像が見えてくるのではないでしょうか。

子ども中心の教育活動を創造するといっても、 保護者・地域、 そして教職員の方々と心をひとつにして取り組むことなくしては成し遂げられません。 心をひとつにするカギは、“人との出会いは必然” との考え方を心の中に据えることだと思います。
人との距離に神経を使うコロナ禍の今だからこそ、心の距離は広げない “人との出会いは必然” との考え方が浸透してほしいと願わずにはおれません。

「真の贅沢というものは、 ただ一つしかない、 それは人間関係の贅沢だ。」※

※「人間の土地」サン=テグジュペリ 著、堀口大學 訳、新潮文庫、1955年4月発行、2012年12月　84刷改版、2015年6月　87刷、45頁から引用